

少女雑誌の部屋から

現在、展示室では「ハイカラビューティフル 大正ロマンの世界」展を開催しています。日本文化と西洋文化の融合により新たな大衆文化が開花した大正時代。自由な雰囲気と世界観は「大正ロマン」と表現され、今なお多くの人々を魅了し続けています。もしかしたら『鬼滅の刃』ブームに乗って関心を持った方もいらっしゃるのではないのでしょうか。本展では、当時絶大な人気を誇った挿絵画家・竹久夢二や高島華宵らが描いた抒情画とあわせて、大正期のくらしや文化などをご紹介します。どうぞご覧くださいね。



雑誌紹介 14

明治30年代～昭和40年代に発行された少女雑誌の中から主なものについてご紹介します

少女世界 (博文館)

明治39(1906)年9月号～
昭和6(1931)年10月号

『少年世界』の妹雑誌として発行された雑誌。同誌に設けられていた「少女欄」を発展させる形で創刊された。表紙や挿絵は鍋木清方、竹久夢二、深谷美保子らが担当している。小説やエッセイのほか、手芸や家事、礼法の記事が目立った。特に創刊当初は良妻賢母主義の教育観が強く出ていたが、徐々にファッションや娯楽の記事も見え始める。各地で開かれた愛読者大会の記録なども写真入りで載せられた。また、北川千代、吉屋信子、森田たまなど、多くの女性文学者たちが誌面で活躍した。大正前期までは最もよく売れた雑誌だったが、後発の雑誌『少女の友』、『少女画報』、『少女倶楽部』など、ライバル誌の出現で勢いが衰えてしまう。

少女雑誌を彩った挿絵画家たち 14

川端 龍子 (かわばた りゅうし) 1885—1966

和歌山県生まれ。本名は昇太郎。10歳の頃に母と上京。東京府立三中在学中の明治36(1903)年に読売新聞社が『明治三十年画史』を一般募集した際、応募した作品のうち『西南戦争の熊本城』と『軍艦富士の廻航』の2点が入選し、本格的に画家を志すこととなった。19歳から洋画を学び21歳で結婚。雑誌の挿絵描きや国民新聞社での勤務で生計を立てながら油彩の制作を続ける。大正2(1913)年、28歳で洋画を学ぶために渡米するが、ボストン美術館で出合った鎌倉期の絵巻の名作を見て感銘を受け、帰国後、日本画に転向した。独学で日本画を習得し、大正4(1915)年、院展(再興日本美術院展)に初入選。大正6(1917)年には横山大観率いる日本美術院の同人となる。昭和3(1928)年、院展を脱退し、翌年自らの美術団体「青龍会」を設立。“会場で人々の心をつかむ力のある作品”を目指す「会場芸術主義」を掲げ、渾身の大作を次々と世に出した。

川端龍子の作品を観るには・・・龍子記念館(東京都大田区)

少女雑誌の豆知識

女子の教育について

大正期における「女学生」は高等女学校に学ぶ12～17歳の少女たちを指します。明治32年に「高等女学校令」が公布され、義務教育である尋常小学校(6年)を卒業した男子だけではなく、女子生徒も中等教育を受けることができるようになりました。男子の旧制中学校に対応する存在として設置されたのが高等女学校です。しかし、進学できるのは経済的に恵まれた家庭の子女に限られていました。従来四年制だった女学校は、大正9年に五年制も認可され、都市部では後者へと移行していきました。